

水籠

伊藤左千夫

青空文庫

表口の柱へズウンズシリと力強く物のさわった音がする。

この出水をよい事にして近所の若者どもが、毎日いたずら半分^いに往来で筏^{いかだ}を漕^こぐ。人の迷惑を顧みない無遠慮なやつどもが、また筏を店の柱へ突き当てたのじやなど、こう思いながら窓の格子^{こうしうち}内に立った。もとより相手になる手合いではないが、少ししかりつけてやろうと考えたのである。

格子から予がのぞくとたんに、板^{いた}塀^{べい}に取り付けてある郵便受け箱にカサリという音がした。予は早くも郵便を配達して来たのじやなと気づく。

この二十六日以来三日間というもの、すべての交通一切杜絶^{とぜつ}で、郵便はもちろん新聞さえ見られなかった際じやから、郵便配達と気づいて予はすこぶるうれしい。この水の深いのに感心なことと思いつつ、予は猶予なくその郵便をとり降りる。郵便箱へ手を入れながら何の気なしに外を見る。前に表の柱へ響きをさしたのは、郵便配達の舟が触れた音でありしことがわかった。

郵便の小舟は今わが家を去って、予にその後背^{うしろ}を見せつつ東に向かつて漕いでいる。屈折した直線の赤筋をかいいた小旗^{ふなばたはき}を舷^{はたき}に挿んで、船頭らしい男と配達夫^{ふたり}と二人、漁船やら田

舟やらちよつとわからぬ古ぶねを漕いでいる。水はどろりとして薄黒く、浮き苔こけのヤリが流れる方向もなく点々と青みが散らばってちようどたまり水のような濁り水の上を、元氣なくゆらりゆらりと漕いでゆくのである。

いやに熱あつく苦しい、南風がなお天候の不穩を示し、生なまあか赤い夕焼け雲の色もなんとなく

物すごい。予は多くの郵便物を手にしながらしばらくこの気味わるい景色けしきに心を奪われた。

高架鉄道の堤とそちこちの人家ばかりとが水の中に取り残され、そのすき間というすき間には蟻ありの穴ほどの余地もなくどつしりと濁り水が押し詰まっている。道路とはいえ心当てにそう思うばかり、立てば臍へそを没する水の深さに、日も暮れかかつては、人の子ひとり一人通るものもない。活動ののろい郵便小舟がなおゆらゆら漕ぎつつ突き当たりのところを右へまがった。薄黒い雲にささえられて光に力のない太陽が、この水につかつて動きのとれない一群の人家をむなしく遠目にみておられる。一切の草木は病みしおれて衰滅の色を包まざいたずらに太陽を仰いでいても、今は太陽の光もこれを救うの力がない。予は身にしみて寂しみを感じた。

静かというは活動力の休息である。静かな景色には動くものがなくても感じはいきいきとしている。今日の景色きょうには静かという趣は少しもない。活動力の凋ちようすい衰すいから起こる寂

しい心細いというような趣を絵に書いて見たらこんなであろうなどと考える。

毒々しい濁り水のために、人事のすべてを閉塞へいそくされ、何一つすることもできずむなく日を送っているは、手足も動かぬ病人がただ息の通うばかりという状態である。

家の中でも深さは股またにとどくのである。それを得避えさくる事もできないで、巢を破られた蜂はちが、その巢跡にむなしくたむろしているごとくに、このあばら屋に水籠みずごもりしている予を他目よそめに見たらば、どんなに寂しく見えるだろう。

しかしながらわれとわれを客観して見ればまた一種得難い興味もある。人間のからだでいえば病氣じや、火難が家の死であれば水難は家の病氣じやなどと空想にふけりながら予は仮床かりゆかへ帰った。仮床というは台所の隣間となりまで、南へ面した一間ひとまの片端へ、桶おけやら箱やら相当に高さのあるものを並べ立てて、古柱や梯子はしごの類をよろしく渡した上に戸板を載せ、それに畳を敷いたものである。畳もようやく四畳しか置けない。それに夫婦のものと児女三人下女げじよひとり一人、都合六人が住んでいる。手も足も動かせない生活じや。立てば頭が天井へつかえる。夜になれば蚊がいる。この四畳のお座敷へ蚊帳かや二つりという次第ではないか。動けないだけに仕事もない。着たままでねる、寝たままで起きている。食物は兄の家からすべてを届けてくれる。子供を水へ落とさないように注意するのが最も重要な事件くらい

のものじゃ。赤ん坊は心配はないが木綿子のおぼつかなく立って歩くのが秒時も目を離せない。今日は木綿子がよく寝たから天井板をきれいに掃除したとは細君のことばである。今日は腰巻きを五へん換えましたとは下女の愚痴である。それもそのはずじゃ。湯を沸かして茶を一つ飲むというには、火をこしらえる材料拾集のために担当者が腰巻き一つはどうしてもぬらさねばならない。それが三度はきまりでほかに一度や二度は水へ降りねばならぬ。で天氣がよければよいが天氣が悪ければ、とても茶を飲むなどという奢りは許されない。今日くらいの天氣ならばラクだとは異口同音のよろこびじゃ。追ッつけ夕飯を届けてくる時刻とて鉄瓶の湯が快活に沸き立っている。予は同人諸君からの見舞状を次ぎ次ぎと見る。かれこれして家の中は薄暗くなった。

「おとつさん水が少し引いたよ」

「ウンそうか」

「あの垣根の竹が今朝はまだ出なかつたの……それが今はあんなに出てしまつて五分ばかり下が透いたから、なんでも一寸五分くらいは引いたよ」

「なるほどそうだ、よいあんばいだ。天氣にはなるし、少しずつでも水が引けば寝ても寝心がいい」

「さつきおとつさんおもしろかったよ。ネイおつかさん、ほんとにおかしかったわ、大きな鰻、^{うなぎ}惜しい事しちゃったの、ネイおつかさん……」

「お妙さん、^{たえ}鰻がどうした」

「鰻ネ、大きい鰻がね、おとつさん、あの垣根の杭^{くい}のわきへ口を出してパクパク水を飲んでるのさ。それからどうして捕^とろうかって、みんなが相談してもしようがないの。それからおふじが米ざるを持ち出して出かけたなら、おふじが降りるとすぐ鰻はひっこんでしまったの。ネイおふじ、網ならどうかして捕れたんだよ」

「そうか、そりや惜しいことをしたなア、蒲^{かば}焼^{やき}にしたら定めて五人でたべ切れない大きいものであつたらう。おとつさんに早くそう言えばよかったハ、ハ、ハ、」

「おとつさんうそでないよ、ネイおふじ、ほんとネイ、おつかさんも見ていたんだよ」

おふじは腰巻きのぬらし損^{ぞん}をしてしまったけれど、そのついでに火を起こしたから、鉄瓶の湯が早く煮立った。それでは鰻が火を起こしたわけじゃないかと、予が笑えば、木綿^{ゆう}子^こまでが人まねに高笑いをする。住宅の病氣も今日はやや良好という日じゃ。いやに熱苦しい南風が一日吹き通して、あまり心持ちのよい日ではなかったけれど、数日来雨は降る水は増すという、たまらぬ不快な籠^{こもり}居^いをやってきたのだから、今日はただもうぬれた着

物を脱いだような気分であった。それに日の入りと共にいやな南風も西へ回って空の色がよくなった。明日も快晴であろうと思われる空の気色けしきにいいよ落ちついて熱のさめたあとのような心持ちでからだだが軽くなったような気がする。金魚が軒下へ行列して来るどじょう。鱈たわが時々プクプク浮いて泡を吹く。鰻うなぎまで出て芝居しばいをやって見せたというありさまだったから、まずまずこれまでにはない愉快な日であった。極端に自由を奪われた境きょうがい涯がいにいて見ると、らちもない事にも深き興味を感ずるものである。

人間の家も飯たを炊かぬものであると、朝にも晩にもすこぶる気楽にゆつくりしたものだ。
「もうランプをつけましょうか」

「まだよかろう」

「それでもよほど暗くなってきましたから」

「どうせ何ができるでなし、そんなに早く明かしをつける必要もないじゃないか」

「こんならちもない押し問答をして時間を送っている。」

表のガラス戸にがちゃんと突き当たったものがある。何かと思う間もなくしずしずとガラス戸を押しあけて人がはいる、バシャンバシャン水音をさして半四郎君が台所へ顔を出した。

「コリヤ思つたより深い、随分ひどいなア」

「半四郎さん、どうも御苦労さま、とんだ御厄介ごやつかいでございます。そこらあぶのうござい
ますからお気をつけなすつて……」

「やア今日は君が来てくれたか、どうです随分深いでしょう。上げ縁あえんは浮いてしまったし、
ゆか板もところどころ抜けてるから、君うつかり歩くと落ちるよ、なかなかあぶないぜ」

「コリヤ劍けん呑だ、なにもう大丈夫、表のガラス一枚破わりましたよ、車へ載せて来ました
からつい梶かし棒ぼうをガラス戸へ突き当ててしまったんです」

「なアによろございますよ、ガラスの一枚ばかりあなた……」

「随分御困難ですなア」

「いやありがとう、まアこんな始末さ。それでもおかけさまで飢えと寒さとの憂いが
ないだけ、まず結構な方です。君、人間もこれだけ装飾をはがれるとよほど奇怪なもので
すぞ。この上に寒さに迫られ飢えに追われたら全く動物以下じやな」

「そうですねア 向 島むこうしまが一番ひどいそうです。綾瀬川あやせがわの土手が
ぎれたというんですか
らたまりませんや。今夜はまた少し増して来ましょう。明 朝みょうあさの引き潮にやいよいよ水
もほんとに引き始めるでしょう」

半四郎は飯櫃おぼらと重箱とほかに水道の水を大きな牛乳罐かん二本に入れたのを次ぎ次ぎと運んでくれる。今夕の分と明朝の分と二回だけの兵糧ひょうろうを運んでくれたのである。まア話してゆきたまえというても腰をかける場所もない。半四郎君はあまり暗くならぬうちにといて帰つてゆく。ランプをつける。半四郎君の出てゆく水の音が闇やみに響いてカパンカパンと妙に寂しい音がする。濁り水の動く浪畔なぐろにランプの影がキラキラする。全くの夜よるとなつた。そして夜は目に映るものの少ないためか、目に見た日暮れの趣にくらべて今は寂しいというより静かな感じが強い。その静かさの強みに、五、六人の人の動きもその話し声もランプの光り鉄瓶てつびんの煮え音までが、静かに静かにと上から圧おさえつけられているようである。かえつて少しの光や音や動きやは、その静かさの強みを一層強く思わせる。湿り気けを含んだランプの光の下に浮藻うきも的生活のわれわれは食事にかかると。佃煮つくだにと煮豆にまめと漬菜つけなという常式じょうしきである。四畳の座敷に六人がいる格で一膳ぜんのお膳に七つ八つの椀茶碗わんぢゃわんが混雑をきわめて据すえられた。他目よそめとは雲泥うんでいの差ある愉快なる晩餐ばんさんが始まる。一切の過去を忘れてただその現在を常と観かんずれば、いかなる境地にも楽しみは漂なうている。予はビールを抜ぬかせる。

木綿子ゆうこの挙動には置四畳の念はない。行きたいようにゆき、動きたいように動いてる。

父の顔を見母の顔を見姉の顔を見、煮豆つくだに佃煮のごちそうに満悦まんえつして、腹の底を傾けての笑い、ありたけの声を出しての叫び、この人のためにだれもかれも、すべての憂うき事ことを忘れさせられる。天地の寂寞せきばくも水難の悲惨も木綿子の心をば一厘たりとも冒すこととはできない。わが身の存在すら知らない絶対無我の幼児は、真に不思議な力がある。天を活かし地を活かし人をも活かすの力を持つている。他目よそめに解せられない愉快な晚餐というも全く木綿子の力である。

あぶないてば木綿ちゃん、という呼び声はこの会食中にばかりも十度とたびも繰り返された。あぶないとは何の事か木綿ちゃんの知った事ではない。木綿ちゃんの行動は天馬空てんまくうを行くがごとくで、四畳であろうが、百畳であろうが、木綿ちゃんにそんな差別はない。人を活かす力を持てる木綿ちゃんは、また人を殺す力も持つてる。木綿ちゃんが寝ないうちはだれも寝られないのである。もしも木綿ちゃんがわれわれの不注意のために、この水に落ちて死ぬような事でもあつたら、少なくとも予一人は精神的に死するにきまつている。木綿子はその幼い手足を投げ出して、今は眠りについた。窓先で枝えだ蛙がえるが鳴く。壁の透き間でこおろぎが鳴く。彼らは何を感じて寂しい声を鳴くのか。空は晴れて膚寒く夜はようやくふけ渡つたようである。

青空文庫情報

底本：「野菊の墓 他四篇」岩波文庫、岩波書店

1951（昭和26）年10月5日第1刷発行

1970（昭和45）年1月16日第24刷改版発行

2007（平成19）年5月23日第49刷発行

初出：「ホトゝギス 第十一巻第二號」

1907（明治40）年11月1日発行

※表題は底本では、「水籠《みずごもり》」となっています。

入力：高瀬竜一

校正：岡村和彦

2019年8月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

水籠

伊藤左千夫

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>